対蒙戦争−講和の過程と高麗の政権をめぐる環境の変化

李　命 美（ソウル大学）

概要

モンゴルとの戦争と交渉、また講和に至る過程は、高麗のなかで政権を掌握していた 武臣政権が終わり、王権が回復されていく過程と連動していた。本発表では、このような過程にみられる高麗王権−政権をめぐる政治−外交的環境の変化について検討してみたい。
以前の高麗の外交−交渉相手とは違い、モンゴルは遊牧国家としての周辺との関係形成を戦争の時期から講和の段階に至るまで持続的に強く要求してきた。30 年から 40 年にわたる戦争と交渉の過程において、高麗側はこのような要求にそのまま応ずることはなく、そのときの状況に応じて対応した。その結果の一つとして挙げられるのが高麗宗室の外交的−政治的活動であった。このような様相は、政治単位の首将間の直接的な対面やそれを含めた個人間−家門間の関係を重視したモンゴルの関係形成の在り方と関連したものであった。高麗王朝体制において太子を含む宗室は、その政治的−外交的活動が表面に表れることは殆どなかったが、モンゴルとの戦争を期に浮き彫りになった高麗宗室の活動の様子は、戦争が終わってからも続き、高麗−モンゴルの関係、及びその中での高麗国王権をめぐる環境の変化をもたらした。
一方で、高麗−モンゴル間の「完全な」講和に至る過程は、高麗の元宗が武臣執権者であった林衍により廃位され、再び復位される過程と重なっているが、この過程もまたモンゴルとの関係による高麗王権をめぐる状況の変化の一面をみせてくれる。既存の東アジア国際秩序の中において、高麗国王は中国皇帝の「冊封」を受けていたが、それは事後的な性格が強いものであり、実際に高麗国王の即位と退位(あるいは廃位)は高麗の内部事情によるものであった。しかし、世子(以後、忠烈王)の請婚（求婚）と請軍が受け入れられ、軍を帯同したモンゴルの詔使が派遣されることになると、高麗王権は「実質的な冊封」と「皇室との通婚」という二つの関係を通じて皇帝権と直接つながることになった。それは既存の国家間関係の形で存在していた「冊封」が実質化していく変化であると同時に、モンゴルにおける政治単位間の関係を媒介−維持する重要な形式であった通婚という家門間の関係形成の形が、高麗−モンゴルの関係にも適用されることになる変化である。それは、相互に関係しながら高麗王権をめぐる環境の変化をもたらしており、このような変化は、以後、高麗−元の関係のなかで発生する様々な政治的事件を誘発した構造的な変化であったと言える。

略歴

ソウル大学の国史学科で学士、修士、博士学位を取得する。修士学位論文のテーマは、「高麗−元の王室通婚の展開と特徴」、 博士学位論文のテーマは「高麗−モンゴルの関係と高麗国王の地位の変化」である(2016、『13～14 世紀における高麗−モンゴルの関係研究−征東行省丞相駙馬高麗国王、その複合的地位に関する探究』ヘアン)。ソウル大学歴史研究所、奎章閣韓国学研究院などを経て現在は人文学研究院の研究員として活動中。国家間関係(東アジア的関係形成方式)と個人間−家門間の関係(モンゴル的関係形成方式)が高麗−モンゴル間の関係のなかで影響し合う様子やそれによる高麗末の政治−社会変動に関心を持って研究している。

原著：韓国語、翻訳担当：金範洙